

KANUMA NO MEISHO

# 鹿沼の名匠

よしはら  
吉原  
こうじ  
幸二



吉原 幸二

組子の材料は、ひのき、並木杉、神代杉(青みがある)など、デザインの色味に合わせて選んでいきます。

組子は家を引き立たせる、旅館や寺で使用され高級品でした。昔は「なげあみ」「干しあみ」など決まったデザインのものが多くみられました。

「そうした伝統の技術・型をアレンジして新しいものを制作していくようになった。面白いもの、変わったものなど、新しい挑戦をしていかないといけない。機械ではできないものを作りたい」と吉原さん。製品はつい立、欄間、書院、コースターなど多岐にわたります。

デザインが決まったのち、設計図となる「墨出し」を行います。この墨出しが最も肝心だそうです。

そして、木材を加工するための「型」を割り出します。木材はお湯で柔らかくし「そり(曲線)」をつけます。細かなパーツを特殊な道具で製作し、組みに必要な勾配を付けていきます。「隙間が空かないように組むのが職人として腕の見せ所」と力強く話します。

何百ものパーツを一つずつ組み上げていきます。時間が経つと木は縮まるため、木が収縮して丁度良いよう、金槌で打ち込みきつく組んでいきます。サンダー、やすり掛けを行い仕上げます。

「木工産業は時代と共に変化しているが、組子を残していきたい。後継者の育成を行っていきたい」と語ってくれた吉原さん。鹿沼で組子をしている人は、吉原さんのもとで修業した人がほとんどです。現在、吉原木芸では3人の息子さんが修行中と、今後も組子作りの挑戦は続きます。

◆ 鹿沼組子製作

☆ 鹿沼市